

# ふるさと奥尻通信

平成26年4月30日  
奥尻町教育委員会発行  
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

## 巻頭語

人生は山あり谷あり、晴天ばかりは続かない。心がふさぐ時、ふと口ずさむのは幼き頃に歌った童謡や唱歌、はたまた懐かしき母校の校歌でしょうか。心に太陽を、唇には歌を。

## 特集 奥尻小学校物語

今年3月31日をもって、奥尻小学校は、元の宮津小学校であった校舎に移り、奥尻町字奥尻428番地から移転しました。同校は明治15年(1882)に、当時の奥尻村大字釣懸村字釣懸に創立した島内唯一の学校で、「奥尻学校」と定められました。当時は、入学児童15名、教師1名で、戸長役場敷地内(現在の竹中アパートあたり)からスタートしたのでした。

明治32年(1899)に大字釣懸村字谷地4番地(現在の北山家裏側)に移転し、名称を「釣石尋常小学校」と改称しました。この頃は赤石地区にも学校があり、釣懸の学校と合併したことで「釣石」と名付けられたものと思われます。大正5年(1916)に大字釣懸村字塩釜沢9番地の2(現在の字奥尻428付近)に移転し、新校舎を建設しました(写真参照)。その後は大正年間に赤石や球島鉦山に分教場を設置し、島内開発の進展とともに教育施設が増えていきました。

戦中戦後の混乱期を経て、昭和20年代には集団的な入植者を受け入れるにあたり神威脇や球浦に分校や新設校を設けるなど、島は人口増加となり、しばらくの躍進期を迎えます。



学芸会 昭和30年3月3日



開校80周年の緑門と4代目校舎



教職員一同と3代目校舎 昭和23年



釣石尋常高等小学校春期運動会 大正7年

昭和31年(1956)には4代目の校舎が完成し、同37年には開校80周年を迎えました。しかし、同年8月の塩釜川の河川氾濫により浸水し、校舎や教員住宅に大きな被害が出ました。島は昭和30年代半ばから離島者が増え初め、日本の高度経済成長とともに人口減少が続くようになりました。同47年に球浦小学校を統合、同48年の鉄筋造3階建新校舎の完成を待って、赤石小学校を統合しました。同校は昭和57年に開校100周年を迎え、記念誌が作成されました。当時の学校は、学級数7で児童217名が在籍していましたが、平成の時代に入ってしばらくするころから児童数が減りはじめ、同25年12月の時点で、学級数5の30名を数えるだけとなり、翌26年4月1日よりの宮津小学校との合併と校舎移転がなされたのです。これからは宮津の地で小学校の歴史が刻まれていくことでしょう。ここで、初代校舎時代を回想する古い記録があるので紹介します。

「校舎は雨が降ると雨漏りがするので、生徒の机や教壇が屢々移動した。11月になると薪ストーヴを焚くが、煙突掃除や薪運びも生徒がやった。春、雪解け期になると、屋根は軒端が夜中の寒さに凍って縁を付けたように高くなっていく所へ、上の方から雪の溶けたのが流れて来て、縁の氷に堰かれて逆流して、ひどく漏るが、北海道ではこれをスガ漏り(氷のことをスガと言う)と言うている。窓際に机を持った生徒は勉強が出来なくなるので、この期間中は、全教室の机と椅子をきっちりとくっ付けなければならなくなり、教室中は一時大変な混雑となるのであった。」(昭和17年「早瀬忠太郎回顧録」より。明治21年入学)



女子職員一同 昭和28年7月16日



在りし日の5代目校舎 平成25年



岬をめぐり 雲光りゆく 北の海  
心はるかな いのちの学舎よ  
さとしく明る いのちの学舎よ  
真の知恵を 求めゆく  
日に新しい 目があけて  
広野を渡る 青い風  
心あつめて この郷に  
強く確かな 手をたくし  
日に新しい 拓きゆく  
潮騒遠き 渚に  
心やさしく わが友よ  
清く平和な 人の世に  
やがての夢を 築きため  
日に新しい 我が祈り



体育館に掲げられた校歌 卒業製作品



在りし日の校舎 平成14年頃

作詩：秋元四郎、作曲：板垣文雄による校歌は3番構成からなります。作詞者の秋元四郎は第17代校長で昭和21年～26年まで在職しました。その前職は奥尻小学校で戦中戦後の過渡期を経験したことを同校の百周年記念誌に記しています。歌詞には、「岬」、「潮騒」、「青い波」など海辺に建つ学校にふさわしい表現が多く使われています。3番の「清く平和な人の世に」のフレーズに、戦後教育の開放的な方向性を感じさせます。また、平成2年には、青苗小学校の中川晃校長が伴奏譜を作曲していますので、新旧の卒業生によっては、多少印象が違って来るかもしれませんね。

月刊 奥尻のつり 4月号

春の釣りシーズンです。中旬ころまではまだ水温が低かったのですが、ようやく温かくなってきたようです。奥尻港、青苗港でもホッケ、カレイがちょこちょこ針にかかっています。今年もホッケは少ないのですが、掛かるのはやや大きめとか。ということは、ロウソクホッケが少ない＝来年もホッケは少ないということか。安価な魚の代名詞だったホッケも、今では高級魚となりつつあります。とにかく、美味いホッケの開きが食いたいなー！一方、マス釣りはそろそろ終盤、しばらくサヨウナラです。今シーズンはマスのフライをたびたび賞味しましたが、シンプルながら実に美味かったです。この味付けはソース派としょう油派に別れるようで、こだわりの声が聞こえました。私はソース派かな。しかもブルドック中濃。

昭和奥尻生活詩 16回

奥尻郡釣石尋常高等小学校一年生「詩集・海に生きる」より

校屋煙	何僕一皆校皆朝	朝
長根、	おはん先廣の	會
生雪く	の家寸よとな	鐘
のきも	でも窓から	に
の話が	く上げ	集
一始	ら	つ
二つ	光	つ
、た	る	た
一	る	ら

新谷清三

い迫民とイをでに途モバ務  
ま力が。ナ回、次中インで四  
しあ集当ルリーいでタド知月  
たるま日を、七で来、ら十  
。生りは迎年九二島ズザれ四  
演、五え末あ箇しが、る日  
奏プ○るに在所ま全ト、  
をロ人予ツ市目し道ン上ブ  
楽バほ定ア町とたツア杉ギ  
しんどと、村の。アツ周  
んののフ全こ江、プ大  
での町こア部と差の専

フギウギ専務来島



土層に残る津波の痕跡

一ふさ 在害り跡らるさの裏来機  
般れれにと、が五といサで島構先日、  
公あま至、奥残回、まん掘し地、質、  
開いするそ尻つも古しプ削、質、  
し研。人れ島てのくた。ル調昨研、北海  
て修サ間ををい大は。を。查年究所、道  
いセンの乗襲るき約断寄し度所、立  
ます。ン営りつこな三面贈た青の苗研究、合  
。一はをえ自が波年観て層中、究研  
て穂像現災 痕かすだ面校が究

津波痕跡を発見！

新年度もスタートしました  
ね。私も来島4年目。そろそ  
ろ”旅の者”と呼ばれなくなっ  
てきたかな？ 巷では、もうすつ  
かり奥尻人だよと言われていま  
すが、ようやくと塩から（地元  
風に言えば、しょがら）の味に  
慣れてきたぐらいで、まだまだ  
です。ホヤも苦手です。（これは  
嗜好の問題かな？）余暇は釣  
りに傾注していますが、もちろ  
ん仕事にも励んでおります。

新来之記録（編集後記）

ど奇史修はと有た島環たれ小  
に岩やセ津企意今の境。た・こ  
見、文ン波画義後教を島先中  
入球化タ館さな。の育知の生・四  
つ島を、やれこ離につ歴方高月  
て山学の稲まと島係て史を等  
いかび展穂しも生わお・案学  
まら、示ふた多活るく文内校  
しの西物れ。々を際こ化しに島  
た。眺海かあ参あ送にと・ま赴  
望岸らい加るる、は、自し任  
なの歴研者うにま、然、さ

奥尻島内をご案内



奥尻小運動会 昭和40年代初頭